

だした、これを見た三人の豪傑は承知せず、蟹オヤツ、怪しか
 らん奴だ、三人で片端から取り締めてやらうではないか、澤オ
 、宜からう……本遣つ付ける……」と、名題の豪傑が
 示し合し、バラリ多勢の中へ躍り込んだと思つたら、エオ
 と喚き叫んで、殴りつけ蹴り倒し、本多平八郎と澤村オ八が叩
 き伏せて廻る後より、蟹江才藏は物でも拾ふ様に、掴んでは投
 げ取つては放り、洵然と河中差して放り込んでゐる、イヤ
 驚いたのは石田の家來でございませう、家ウツ、此奴は敵は
 ん、天下でも脊負つて行こうといふ豪傑三人が荒れだしては堪
 らない、三十六計逃ぐに若かず、生命あつての物種だ、畑あつ
 ての芋種だ」と、真逆そんな事も申しませうまいが、残りの奴は
 右往左往に逃げ出し、到頭一人も居なくなつた三人はカラ
 と打ち笑い、本アハ……存外手應のない弱い奴だ……オ、
 助兵衛と赤星は、まだ遣つてゐる、ソレ行けい……」と、ヤツ

とばかりに平八郎が、何なく船中へ飛びこむと、澤村オ八と蟹
 江才藏も同じく飛びこみ、蟹イヤ、面白……助兵衛負り
 赤星勝てい、ハツケイヨイ……残つた……ソレ助兵
 衛が組み敷かれた……澤オヤツ、蟹江、兩人は必死でやつて
 居るに冗談いつては不可ない、夫はそうと本多、蟹江、花房助
 兵衛は大開殿下の横面を殴つたのを鼻にかけて、生意氣で仕方
 がないから、吾々三人が手傳つて、助兵衛の野郎を河の中へ浸
 けて、水を吞ませてやらうでないか、蟹オ、其れはよからう、
 愉快だ……」と、赤星太郎兵衛の押しつりて居るのも構は
 ず、三人は助兵衛の手取り足取り、本オヤツ、赤星其處退り
 此奴は兎角生意氣で困るから、以後グウの音も出ない様に、水
 へ入れたり出したりして懲してやる積りだ」と、藻掻き苦むを
 事ともせず、本多平八郎は両手を掴み、右の足には蟹江才藏、
 左の足は澤村オ八が掴んで、ソコ……船縁へ持つてくる、助

兵衛が幾等大力でも、赤星太郎兵衛と遣りあつて疲れている處へ、然も三人が一度に集つたから堪らない。花ア、待つてくれ、無茶をするな、何を……澤エ、イ、何も糞もあるかい、日頃豪そうな事を吐す罰に貴様を河の中へ付けたらしたり、水を吞ませてやるのだ。花夫れは、卑怯だ、貴様等と俺と意見が違ふのは仕方がない、左様な亂暴をしちやア困る。本歌れッ、困らす考へだ……蟹ソレ、何うだ……もう水へつかかるぞッ。花ア、待て、夫で手足を放さるると、海然と落ちこんで仕舞ふ……本イヤ、落ちこます氣遣はない、マズ水を飲ますのが目的だ。花ウア、大變……赤星仲直りをしやう、助けてくれ……森本……大木何を笑つてい、頼む……蟹……、一、到頭弱音を吹きたした、夫じやア助兵衛、この後は大開殿下の横面を抛つた牙と吐して、威張らぬかどうとや、確と返答しろ。花ウム、断然いはない。

威張る事は廢す……、最ふ堪へてくれ……本ヨシ、然らば許してやらう、間違つたら承知しないぞッ。花イヤ、決して間違へん……、漸く花房助兵衛は、三人に手足を放して貰いな、何うだまだ酒肴が大分ある様だ、近附のために一杯遣らうではないか。澤ハ……、助兵衛が最ふ威張だした。果ては大笑いと相なつて、双方互いに、挨拶をいたし、七人は一座となつて、お樂の酌に充分酌なし、漸々日の暮れ方に、船を八軒屋の更科屋の裏手へつけ、後日の再會を約して、一同思。い、に立ち去る中に、赤星太郎兵衛と森本儀太夫、大木新吉郎の三人は、肥後橋の加藤家お藏屋敷へ戻つて参り、茲に赤星太郎兵衛は、改めて主君清正公にお目通りをして、漫遊中の一伍一什を物語り、まつた飯田愛兵衛始め夫々面會して挨拶をのべ、二三日逗留しておりましたが、イヨク諸國大名は、メン

夫 太 儀 本 森

く、と本國差して引き揚げる、清正公も兵船五六艘を列ねて、家來一同を引き纏い、川口より出帆、順風に帆を揚げて、海上、兵衛、森本儀太夫、大木新吉郎の三人もお供をして立ら歸つたのでございませぬ、日ならずして秀吉公も肥前名護屋へお越しとなり、茲に本城を構へて、朝鮮征伐の指揮命令をする事となし、加藤主計頭清正公と小西攝津守行長公をもつて、左先鋒右先鋒といたさされる、イヤ加藤家の勇士豪傑は、これを聞いて喜悅ん、だの轉んだのじやアございませぬ、中にも木村又藏、井上大九郎の兩人は、乗り出さぬ先から、早や戦をやつて居る様な氣持ちで、夜もオチ／＼睡られぬ、木村井上、今度の戦争は異國の奴だから、思ふ存分切つて、切り捲つてやらうでないか、大アア、朝鮮のバア／＼共、何條恐る、事のあるべき、榮か

夫 太 儀 本 森

大根を切る様に、手當り次第に雄ぎ倒してやるんだ、夫れは左様と、大木新吉郎は留守居を仰せ付かつたといふので、情氣込んで居つたが、可愛想になア、又イヤ、俺もそれを心配して、るのだ、今度の戦争のお供が出来ないどあつては、此の上ない武士の耻辱だとかいつて居つたが、万一腹でも切つては、大變だと心配して居る、大一つ、何とか工夫をして、我が君にお願い申して見やうではないか、新吉郎はまだ戦争には出た事がないのだから、又「左様だ、初陣だ……」と、互いに話して居る處へ、赤星太郎兵衛と森本儀太夫がやつて参り、太オ、木村井上の兄貴、俺は折りいつて頼みがあるが聞いては呉れまいか、又「ソム、眞面目な顔して何の頼みだ、儀イヤ、實は他ではない、彼の大木新吉郎は今年十七才、昨年元服をしなければならん所、今迄延々になつて居るといふ始末だ、夫れもよいが今度の朝鮮、出陣に、吾君が先鋒仰付かつたにも關らず、主君様より居残り

役を仰せつけられ、大變驚き込んで、お身達も知つて居る通り、彼の新吉郎は吾々が雨親に頼まれて、天晴な人物に仕立て、やらねばならんのだ、所が彼の様に凹たれて居つては、しもの事が無いとも限らん、左様な事でもあつたには、赤星と俺とは申し譯がない事になる、死んだ新吉郎の係親が、吾々を恨むであらうと思ふ、誠に濟まんが、吾が君にお願ひ申し、吾々を申しますと、大「イヤ、其の事は今木村と話して居た所だ、夫で之よりお願ひ申して見やうではないか、大「オ、宜からう」と、木村又藏、井上大九郎、赤星太郎兵衛、森本儀太夫の四人は、清正公のお目通りへ出て、この事を言上いたしましたすと、清正公は點頭き給ひ、清「フム、左程新吉郎が登つて居るのか、手は彼れがまだ若年ゆへ、行末を思つて居殘れと申しましたのじゃ、其れはと思ひ込んで居る事であらば、如何にも召し連れるであら

う、序に本日只今彼れに元服させい……と、有難きお言葉が下つた、四人は大いに喜悅んで、直様新吉郎に此の事を傳へますと、新吉郎は天にも登る心地して、急ぎ身仕度を整へ、御前に罷り、茲に於いて清正公は、自ら烏帽子親となられ、新吉郎の元服の式を行ひ、名を大木土佐春元と下し給はる、尙ほ重立つ面々を呼び寄せ、大木土佐春元の腕前を取り調べて見る、若年ながら武藝十八番は例に知らぬといふ事なく、木村又藏等の連中も扱ひ兼ねるといふ有様、清正公は大いに大木土佐の腕前を賞し給ひ、茲で加藤家二十四將といふのをお拵へに相なつた、其の二十四將の連中は、第一番が飯田覺兵衛、木村又藏、井上大九郎、班鳩平次、赤星太郎兵衛、森本儀太夫、齋藤立本、加藤美作、加藤馬之助、長尾安左衛門、三宅角左衛門、庄林準人、出雲田宮内、大木土佐、大脇六郎右衛門、神原治右衛門、吉村吉右衛門、堤權左衛門、貴田孫兵衛、太田半左衛門

阿波伊兵衛、小關平助、小代下總、これを二十四將といたる、
 大木土佐の喜悦はいかばかり、手の舞い足の踏む處も知らんと
 いふ有様で、勇み返つて居ります折柄、朝鮮出陣の日取りも定
 まり、清正公は本國熊本城を立つて、肥前名護屋へ繰り込まれ
 三月十二日辰の刻に名護屋出帆といふ事極つた、茲で小西攝津
 守行長と、イロ／＼出船の事について、争いを生じましたが、
 夫れ等の事は大関朝鮮征伐の巻に詳しく口演じてありますから
 茲には申し上げません、扱てもイロ／＼加藤主計頭清正は、二
 十四將の面々を始め、一騎當千の家來を従へ、小西行長が釜山
 浦へ上陸したるに引き代へ、自分等は方向を變へて、熊川の港へ
 上陸なし、藝進に忠州府へ乗り込み、小西攝津との對面一條、
 引き續いて森本儀太夫光成が晋州城の門破り、赤星太郎兵衛、
 大木土佐の兩人が蔚山城の大勳といふお物語りに引き移るの

でございませうが、例に依つて最早や紙敷の限りと相成りまし
 たるに付き、本編は一先づ此の邊で預かり置まして、不日第
 三編を「加藤家十勇士大木土佐」と、演題を現はし、朝鮮に於
 ける三豪傑の勳き一條より、秀吉公御他界の後において、特に
 三豪傑が清正公の命を蒙り、再度諸國漫遊の實に壯快極ま
 大活劇は、何卒後編の出版を待つて、前編中編とお引き合せの
 上、相變らす應揚の御愛讀あらん事を、豫め願つて置きます
 嗚御退屈さ……。

加藤家
 十勇士
 森本儀太夫終

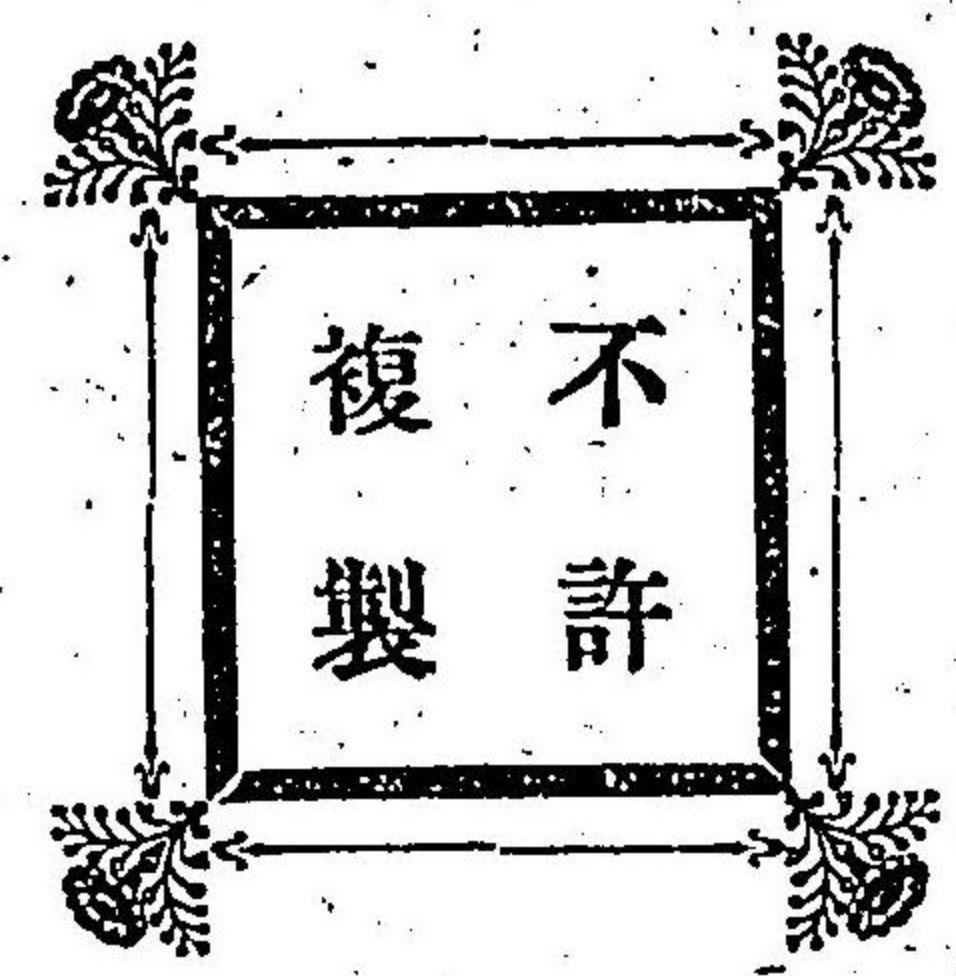
阿波伊兵衛、小關平助、小代下總、これを二十四將といたる、
 大木士佐の喜悦はいかばかり、手の舞い足の踏む處も知らんと
 いふ有様で、勇み返つて居ります折柄、朝鮮出陣の日取りも定
 まり、清正公は本國熊本城を立つて、肥前名護屋へ繰り込まれ
 三月十二日辰の刻に名護屋出帆といふ事極つた、茲で小西攝津
 守行長と、イロ／＼出船の事について、争いを生じましたか、
 夫れ等の事は大閩朝鮮征伐の巻に詳しく口演じてありますから
 茲には申し上げません、扱てもイロ／＼加藤主計頭清正は、二
 十四將の面々を始め、一騎當千の家來を従へ、小西行長が釜山
 浦へ上陸したるに引き代へ、自分等は方向を變へて、熊川の港へ
 上陸なし、藝進に忠州府へ乗り込み、小西攝津との對面一條、
 引き續いて森本儀太夫光成が晋州城の門破り、赤星太郎兵衛、
 大木士佐の兩人が蔚山城の大働さといふお物語りに引き移るの

でございませうが、例に依つて最早や紙數の限りも相成りまし
 たるに付き、本編は一先づ此の邊で預かり置かしまして、不日第
 三編を「加藤家十勇士大木士佐」と、演題を現はし、朝鮮に於
 ける三豪傑の働さ一條より、秀吉公御他界の後において、特に
 三豪傑が清正公の命を蒙り、再度諸國漫遊の實に壯快極まる
 大活劇は、何卒後編の出版を待つて、前編中編とお引き合せの
 上、相變らず應揚の御愛讀あらん事を、豫め願つて置きます
 嗚御退屈さ……。

加藤家
 十勇士
 森本儀太夫終

267
303

明治四十四年十月十日印刷
明治四十四年十月十五日發行



(大賣所)

岡三名柏岡矢樋大井松此中石博立
本宅倉原本島口淵上本村川田多川
增同昭奎偉誠隆駿一金欽玉積成文
進盟文昭奎偉誠隆駿一金欽玉積成文
堂館文昭奎偉誠隆駿一金欽玉積成文

講演者 玉田玉秀齋

發行者 立川熊次郎

印刷者 蒲田德之助

大阪市東區博勞町四丁目十三番地

川文明堂
發行